●島根県立大学　北東アジア地域研究センター

NEAR News

Institute for North East Asian Research,The University of Shimane

第35号
2010.3.

〈巻頭言〉楽しみながら地元に向き合う …… 1
第4回市民研究員定例研究会報告 …… 2
第20回日韓・日朝交流史研究会 …… 2
第4回「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会 … 3
第5回「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会 … 4
NEARセンター助手の研究会の開催について …… 4
NEARセンター研究員の研究活動⑥ …… 5
NEARセンター短信 …… 6

楽しみながら地元に向き合う

NEARセンター長　井上　　治

先頃、今年度のNEARセンターの実績をとりまとめ、次年度の計画の策定をほぼ終えた。毎年やってくる回顧と展望は、わたしにとっては常に反省の機会となる。今回の回顧と展望の中で思いを致したのは、NEARセンターの研究員は自分の専門分野に関する研究に納得できる程度まで取り組めたか、ということである。

NEARセンターは、本来的には日本を含めた北東アジア地域に普遍的に存在する問題群を社会科学・人文科学の立場から超域的に研究することを使命としている研究機関である。また、地域に根ざした公立大学の付置研究機関でもあるので、日本・島根・石見・浜田に存する問題群を対象とした研究にも意欲的であらねばならない。われわれセンターの本分を踏まえるならば、そのような問題群を北東アジア地域という枠組の中で捉えた研究を志向するのは当然のことである。ここ一、二年、わがセンターの研究員の大半はこうした考えから、NEARセンターでの研究として、島根・石見・浜田の地域振興を北東アジアの枠組の中で考察することに従事している。

しかし、わがセンターの研究員のほとんどは、大学が立地する地域の振興に関する研究に従事した経験を元来持たない者である。これはおそらく本学の教員の一部にも当てはまることだと思う。現在従事しているNEARセンターとしての研究が自分の学問領域や専門分野に一致していれば問題ない。しかしそうではない場合があることは深く憂慮すべきである。たしかに島根県が浜田市に設置した大学であるので、島根県立大学の教員は島根や浜田に有益な研究をせよとの声は理解できる。本学の統合法人化に当たり、われわれセンターもそれを重視し、現在に至るまでそれに適うべく邁進し、一定の評価を得てきた。その一方で、自分の本来の研究が埋没させられ、挙げられるはずの成果が出せなくなってしまうようでは、研究員の意欲が減退するばかりである。また、島根や浜田にかかわりのない研究をおこなっているなどと評価されるような雰囲気の中に身を置くことは苦痛以外の何者でもない。わたしは、そのような現状と雰囲気作りに血道を上げてきた張本人であるとの反省を強くした。

わたし個人のことに関して書くならば、自分の本来の研究はあまり進まなかったので、地域貢献関連の研究と調査をやり玉に挙げている自分に気がついた。しかし不思議なことに、取材調査自体が苦痛であったとは感じていない。ひとりの島根県民、浜田市民として生活の場を共にしている方々との対話や北東アジアに開かれた浜田の姿を想像することは楽しかった。自分の本来の研究ではないことをやる以上、楽しく考える中で地元にたいする理解を深めることができたことは救いであった。楽しく地元に接する。これが、地元の声に向き合うことが求められる島根県立大学の一員としてのNEARセンター研究員に適したあり方なのかもしれない。

第４回市民研究員定例研究会報告

年が明けて初めての定例研究会が2010年１月23日（土）、本学交流センター･コンベンションホールで開催された。この時期の慣例に従い､今回は、４名の市民研究員にそれぞれが取り組んでおられる研究を報告して頂いた。以下、ご報告順に概要を紹介する。

大場利信氏は「農民工子女の教育の機会均等と農民工問題について」と題する報告で、本学大学院北東アジア研究科博士前期課程の陳凱君との共同研究に携わった経験に加えて、ご自身が数年来関心を持って探求してきた日本と中国の教育問題に関して、マクロ的視点から教育関連法制度や教育政策を日中間で構造的に比較する議論を展開した。年末年始にかけて周到に準備なさった原稿は26頁にも及び、豊富な資料を整理しながら教育の機会均等、教育内容および水準の標準化、地域間格差などの問題に対して切り込んでおり、陳君の修士論文作成にも大いに刺激を与えたに違いない。

岡崎秀紀氏は「外国語文献にみるチベット探検僧・能海寛（1868～1901）」と題する報告で、現在の浜田市金城町出身で1900年前後にチベットを探訪した能海寛の行動と業績に触れた外国語文献を蒐集した成果を披露した。日本語では『能海寛著作集』（金子民雄監修、能海寛研究会編集、全15巻17分冊）が刊行され、英語・フランス語・ドイツ語・中国語の文献リストも整備が進んでいるとのことで、研究機関に属さない市民の方々の熱情が能海寛研究を支え、リードしていることに感銘を受けた方も少なくなかったであろう。

阿部志朗氏は「日本海沿岸地域の石見焼の分布と流通について」と題する報告で、江戸時代後半から石見地方で生産されてきた石見焼が、北海道から北陸にかけて日本海沿岸各地に現存することに関する調査結果を報告した。江戸末期から明治・大正・戦前にかけて北前船などの海上貨物輸送に適した石見焼の、「はんど」と呼ばれる水甕の特性に着目することで、近代日本の交通輸送体系の変遷や地域の生活様式の変化を捉える指標となることを提示した。阿部氏は、福武学術文化振興財団から研究助成を獲得しておられ、本格的なフィールド調査やアンケート調査に基づく実証研究の成果報告に圧倒された。

田中文也氏は「新説　邪馬台国山陰説　論点整理」と題する報告で、邪馬台国の位置をめぐって畿内説と九州説が拮抗する古代史論争の論点を整理し、魏志倭人伝の記述内容への過度の依存や恣意的解釈を戒め、神話や民俗伝承、青銅器の発掘状況、古墳の形状、古代の海水面変化などを総合的に分析する「新しい古代史研究」を提唱した。古代山陰の地に､高度な文明ないし王国が存在し、それが邪馬台国だったとする仮説に想像力を喚起され、古代のロマンに思いを馳せた方も多かったことと思われる。

４名の市民研究員の熱のこもった報告に刺激を受け、その後の質疑応答も活発におこなわれ、盛況のうちに定例研究会を終えることができた。

（研究員　佐藤壮）

第20回日韓･日朝交流史研究会

2009年11月27日（金）、第20回日韓・日朝交流史研究会が開催された。今回の研究会では、植民地朝鮮における朝鮮語教育について研究活動を行っている科研の研究会（代表：植田晃次氏）をお招きし、朝鮮語関連の最先端の研究についてご報告いただいた。今回の研究会では、植民地時代における朝鮮語教育だけではなく、朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮と称す）の言語政策についての報告も行われ、朝鮮半島の言語に関する

多角的な研究の一端をうかがうことができた。今回の報告者は植田晃次氏（大阪大学准教授）、矢野謙一氏（熊本学園大学教授）、呉大煥氏（島根県立大学准教授）の３名である。以下、それぞれの報告内容についてまとめておく。

◎植田晃次氏「宝迫繁勝の経歴とその著作」

植田氏は近代日本における朝鮮語教育史の比較的初期、19世紀後半に朝鮮語学習書の編纂･出版･校正に携わった朝鮮語学者、宝迫繁勝について、その経歴や著作を中心に報告した。朝鮮に渡ってからの朝鮮語関連著書等に関わるまでの経歴や、朝鮮から日本に戻ることとなった経緯、及び朝鮮とは関係を絶ったかに見えるその後の活動の軌跡についてはまだ不詳な点が多いと指摘した。また、著作に関しては、宝迫の関連著書や著書の広告文言の分析から朝鮮語関連のものとそれ以外のもの（道徳・政治関連）とに分け、宝迫の著作の流れについて述べた。

◎矢野謙一氏「漢字使用の廃止と語彙の整理」

文盲退治や植民地教育政策からの解放を目的として、1946年に北朝鮮では党機関紙や初等教育の教科書などにおいて漢字の使用を廃止する言語政策が実施された。矢野氏は、この政策によって漢字で書かれている文献が読めなくなり、また漢字文化圏との交流が困難となったが、これはこの言語政策の実際の目的が国際社会からの情報遮断や語彙整理にあることを示していると論じた。

◎呉大煥氏「朝鮮語研究会の教育活動と教育内容―朝鮮語奨励試験との関連性を中心に―」

呉氏は植民地時代「朝鮮語研究会」が出版した『朝鮮文朝鮮語議事録』と『月刊雑誌朝鮮語』を考察することにより、「朝鮮語研究会」における教育活動や教育内容、またそれらと朝鮮語奨励試験との関連性について報告した。「朝鮮語研究会」が実質的に教育活動を展開していた時期は1920年代の数年間であったことや、教育内容は朝鮮語奨励政策の試験制度と緊密な関連性を持っていたことを示し、同研究会が朝鮮語教育の内容と方法において、言語能力のレベルを考慮した教材の開発や、朝鮮語科目の細分化、朝鮮語学習法の詳細化、原始的な教育課程の創始、言語到達度の評価に影響をもたらしたと論じた。

（助手　鄭世桓）

第４回「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会

2009年12月７日、第４回「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会が開催された。今回は、飯田泰三教授が「アジアの中の日本学」と題する報告を行った。この報告は、同教授が、長年かかわっておられた法政大学21世紀COE「日本発信の国際日本学の構築」でのご研究を基にして、北東アジアにおける「古層」の重畳性に着目してこの地域のアイデンティティの形成過程を考察した。

まず、同教授は、政治思想史、文化人類学、民俗学などの方法を総合的に駆使しながら、文化移動・文化接触による文化変容・文化発展（acculturation）という視座を設定し、「稲のアジア（長江文明）」と「海のアジア（南方からの視点）」との連関性から日本文化の形成過程を考察する。たとえば、日本文化の形成・展開を考える際、従来は中華文明の影響が圧倒的に強く、その場合の中華文明は黄河文明を中心に捉えられていたが、実はその前の段階に長江文明につながるものがあり、日本文化の古層を形成していたのではないかとする。つまり、長江はチベットの高地に発して雲南省・四川省・湖北省・湖南省・浙江省・上海へと流れているが、この流域で発生した稲作が縄文晩期の日本に入ってきて、稲作文化が広くアジアとの繋がりの中で、日本文化の古層を形成してきたことを強調する。

このように日本文化の古層の成り立ちを見ると、それは広く中国を含むアジアにおける文化移

動・文化接触の過程で形成されてきたものであることが理解できる。そして、同教授は、このような文化接触が次々と層として積み重なり、日本における「天皇制古層」の下に「アジア古層」、さらにその下に「人類学的古層」があり、その重畳性の中で地域アイデンティティが形成されているのではないか、という問いかけを行う。

北東アジアにおいてアイデンティティを考察する際、しばしばこの地域の厳しい国家間対立という現実からその可能性の是非が問われてきたが、近代的な国民国家形成以前から続く文化接触の過程を見ると、そこにはこれまでとは違うより複雑で多様な北東アジアがその姿を現すと考えられよう。（研究員　江口伸吾）

第5回「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会

2010年１月19日、第５回「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会が開催された。本学の超域アジア研究会では、昨年までのあいだに中国・モンゴル・韓国・ロシア各国における北東アジア研究の現状についてディレクトリを作成し、その傾向を分析する作業を進めてきた。今回の研究会では、その業績を引き継ぎつつ論点を共有するために、超域アジア研究会での分析成果の一つとして、「中国における北東アジア地域研究の概観」と題して、唐燕霞教授、江口伸吾准教授、李暁東准教授より報告が行われた。ここでは、中国の北東アジア研究の代表的な学術誌として、吉林大学東北アジア研究センターが刊行する『東北亜論壇』（Northeast Asia Forum）および天津社会科学院東北アジア研究所が発行する『東北亜学刊』（Journal of Northeast Asia Studies）の近刊（2004～2008年）を題材に、以下の三つのアプローチからのレビューがなされた。

第一は、唐教授による「東北経済の振興と北東アジア」のアプローチである。ここでは、主として貿易や地域振興・発展戦略といった経済的な研究の特徴が取りあげられている。第二は、江口准教授による「北東アジア地域協力」のアプローチである。ここでは、中国とその他の北東アジア諸国との二国間の経済協力体制をベースに、幅広く国際的な協力関係の構築を目指す議論が行われていることが指摘されている。第三は、李准教授による「北東アジアの歴史と文化」のアプローチからの分析である。ここでは、歴史や文化、思想史的なアプローチの研究が主に取りあげられ、国別の研究や比較研究以外にも、北東アジアという枠組みを強く意識した研究も現れつつあることが指摘されている。

総じて言えば、それぞれの論者も指摘されたことであるが、中国における北東アジア研究は、国家を超えた枠組み・地域としての北東アジアに主眼があるのではなく、国内問題との関連の上でそれぞれの北東アジア諸地域の研究が進められているという特徴があるように感じられた。その意味で、とりわけ実践的、実学的な側面が強い。北東アジアでの経済交流が進むなか、北東アジア地域にたいする理論的考察はその端緒についた段階であるが、今後の展開が注目される分野でもあると考えられる。（研究員　坂部晶子）

NEARセンター助手の研究会の開催について

NEARセンターでは2009年11月より助手を中心とした研究会を開催している。各助手が現在取り組んでいる研究の中間報告を行い、インフォーマルな雰囲気の中で議論を深めつつ次のステップへと研究を前進させる足がかりとすることを目的としたものである。正副センター長をはじめ有志の研究員の方々に参加をいただき、これまでに３名が報告を行った。

まず、第１回（2009年11月13日）では、新井が「チャールズ・テイラーにおける近代理解の枠組みと哲学的人間学――解釈学的な全体論とその隘路をめぐって」というタイトルのもとに報告をした。テイラーは「近代とは〈神の死〉の時代である」という言説を額面どおりに受け取ることを拒み、西洋近代における〈意味の不在〉を意味の体系の中に囲い込もうとする。そういったテイラーの議論の前提となっている人間像はいかなるものなのか、それが彼の近代理解の枠組み、とりわけ

‘social imaginaries’という概念装置をいかに支えているのか、またテイラーの人間学にはいかなる問題が見出されるのかを本報告では概観した。

2009年12月11日に開かれた第２回の研究会では、王鳳助手が「90年代以降の中国の社会意識に関する研究（仮）」について報告を行った。科学研究費補助金をえて2009年度に王助手が着手した研究「虚妄と切実の間――改革開放後における『欲望』とイデオロギーとの関係をめぐって」の中間成果となるものである。改革開放後の中国における社会意識の変化を扱った既存研究を、１）若者の価値観に着目して論じたものと、２）伝統から近代へという社会転換として変化を理解するもの、さらには両者が看過してきた80年代と90年代の差異を強調する３）カルチュラル・スタディーズによる消費文化批判、に大別して緻密にサーベイした本報告は、ともすれば素朴なイデオロギー批判に回収されてしまいがちな改革開放をめぐる言説を批判的かつ丁寧に整理して問題の所在を明らかにし、今後の研究の素地を整える非常に有益なものとなった。

鄭世桓助手が第３回の研究会（2010年１月22日）で行った報告、「朝鮮語学習書『韓語通』の言語学的一考察――動詞についての記述を中心に」は、科学研究費補助金による研究「朝鮮植民地期の朝鮮語奨励政策による朝鮮語教育の言語学的考察」の最終成果の一部であり、それゆえ完成度の高いものであった。1909年に出版された日本人向けの学習書『韓語通』は、朝鮮語文法をきわめて体系的に扱っており、断片的な解説が一般的であった当時の朝鮮語語学書の中では稀有なものであるという。鄭助手は『韓語通』における動詞の扱われ方に着目し、それを丁寧に検証してゆくことによって同書の特徴を照射してゆく。そして、日本語学を土台としていることから生じる限界を抱えているとはいえ、『韓語通』における朝鮮語の体系化はその後の朝鮮語学習書のあり方に大きな影響を及ぼした可能性が高いと肯定的に評価する。

それぞれの会では、報告に続いて参加者からコメントや質問があらゆる視点から投げかけられた。報告者や参加者の学問領域・研究分野はさまざまであるが、寄せられたコメントはそういった差異を超えて、研究としての完成度を高めるのに資するきわめて建設的なものばかりであった。こういった機会を与えていただけることに感謝しつつ、いただいた助言を活かすことができるよう励んでゆきたい。　（助手　新井健一郎）

NEARセンター研究員の研究活動⑥

≪センター研究員の活動をリレー連載で紹介しています。今号は福原裕二研究員にご執筆いただきました（編集部）≫

韓国の“鬱陵島”という島をご存じだろうか。鬱陵島は、島根半島から北西に約300㎞、隠岐諸島から同じく北西に約250㎞、竹島からは西北西に92㎞の日本海上に浮かぶ鐘状の火山島である。面積は約72.9平方㎞であるから、隠岐諸島全体（346平方㎞）のおおよそ５分の１くらいの広さの島である。ここに現在、１万人程度の人々が暮らし、漁業と観光を生業の中心にしている。1970年代には、人口が２万人を優に越え、韓国で最も一人当たりの所得が高い場所として活況を呈したこともあった。

《鬱陵島での聞き取り調査の一コマ》

鬱陵島はその位置関係からか、山陰地方と浅からぬ縁を持った島である。よく知られているところでは、江戸時代の初め頃に米子の大谷・村川両家がアワビやワカメを採取するために、幕府に渡海を願い出て、年交代で同島へ渡っていたという。ここ地元浜田の「偉人」八右衛門（今津屋）も天

保４年（1833年）に当時の竹嶋（現鬱陵島）へ不届の渡海をした廉で処刑されたことはつとに有名である。さらに近代へと至り、明治34年（1901年）頃の記録によれば、島民3,888人のうち、548人の日本人居住者を有し、その中の308人もの人々が島根県出身者であったとされる（鳥取県出身者60名を加えると、全体の７割弱に達する；『通商彙纂』第234号［明治35年10月16日］43-51頁）。かかる鬱陵島日本人居住者の出身地別の傾向は、植民地時代にも継続して見られたようであり、このことは1970年代初めに鬱陵島からの引揚者によって結成された「欝陵島友会」の会報『欝陵島友会報』からも伺うことができる。

以上のような山陰地方出身者を中心とする日本人の存在が色濃く伺える鬱陵島であるが、朝鮮時代における450年以上もの永きに渡る空島政策とその間隙を縫う形で進められた日本人の渡海の時代を経て、朝鮮王朝が空島政策を一転して植民政策を開始した1882年以降の時期、すなわち鬱陵島近代の足跡は存外明らかにされていない。具体的には、朝鮮王朝の植民政策及び朝鮮人の移住はどのように進められたのか。翻って、日本人の鬱陵島移住は如何なる展開を遂げたのか。日本人移住者によって伝播したとされる漁業は、いつ、どのような形で創始され、定着したのか。植民地下鬱陵島における朝鮮人と日本人の関係をどのように素描することができるのか。日朝双方の周辺地域（離島）であるがゆえに、比較的国家の枠組み（日本の植民地政策）から自由な形で日本人と朝鮮人の「共生」が営まれていたとは考えられないか、等々…。

幸いにも、今年度から筆者は、「韓国鬱陵島の近代―水産業の史的展開を軸にした知られざる日本という存在の実証的解明―」とのテーマで、外部資金（福武学術文化振興財団）により研究を進める機会を得た。本来、北朝鮮の政治・外交史や戦後の日韓関係史を「得意」とする筆者であるが、最近は朝鮮半島の「地域」研究と島根を中心とする「地域」とを結ぶ研究に取り組んでいる。

（研究員　福原裕二）

NEARセンター短信

●秋学期の調査・報告活動（2009年10月～2010年３月）

〇井上治研究員

・京都・大谷大学にて、科研A「世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究―過去の復元から未来への保存へ―」（代表：大谷大学教授松川節）研究集会参加（10月17～18日）。
・東京にて、トヨタ財団研究助成「新疆民間のモンゴル語伝統文書の保存と集成－イリ地方のオイラド=モンゴル人を中心に－」（代表:井上治）の研究成果にかかるマイクロフィルム作成の打ち合わせ（10月23～26日）。
・韓国・大邱・啓明大学校にて、第19回日韓・日朝交流史研究会（第２回独島／竹島研究会）参加（10月28～30日）。
・中国・上海にて、浜田地域振興研究会にかかる現地調査（11月５～８日）。
・中国・北京・中央民族大学にて、大学間交流に関する協議（11月24～26日）。
・浜田市にて、浜田地域振興研究会にかかる現地調査（12月２日）。
・江津市にて、浜田地域振興研究会にかかる現地調査（12月４日）。
・浜田市にて、浜田地域振興研究会にかかる現地調査（12月10日）。
・第４回NEARセンター市民研究員定例研究会参加（１月23日）。
・江津市にて、浜田地域振興研究会にかかる現地調査（１月25日）。
・松江市にて、浜田地域振興研究会にかかる現地調査（１月28日）。
・ポーランド・クラクフ市にて、科研A「世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究―過去の復元から未来への保存へ―」（代表：大谷大学教授 松川節）にかかる現地調査（２月６～15日）。
・「交錯する北東アジア・アイデンティティ研究会」報告（２月16日）。
・東京・東京学芸大学にて、モゴール語の研究に関する打ち合わせ（２月22日）。

・第５回NEARセンター市民研究員定例研究会参加（３月６日）。
・本学にて、浜田地域振興研究会成果報告会で成果報告（３月27日）。

○江口伸吾研究員

・兵庫県・神戸国際会議場にて、日本国際政治学会2009年度研究大会・部会13「中国の政治参加とボトムアップの政治改革」にコメンテーターとして参加（11月８日）。
・台湾・台北にて、浜田市地域振興研究会にかかわるアンケート調査を実施（11月９～13日）。
・長野県佐久市にて、環境省メガワットソーラー共同利用事業モデル・佐久咲くひまわりのインタビュー調査を実施（12月10～11日）。
・第５回「交錯する北東アジア･アイデンティティの諸相」研究会にて、「中国における北東アジア地域研究の概観」と題する報告（１月19日）。
・浜田市にて、科研費基盤Bのワークショップ「中国基層社会の『社区』建設と自治のあり方」にコメンテーターとして参加（３月９日）。
・浜田市にて、「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会のワークショップ「重層的アイデンティティと地域研究の高度化」において､コメンテーターとして参加（３月15日）。
・浜田市と島根県立大学との共同研究成果報告会にて、台湾・台北での調査結果についての報告（３月27日）。

○魁生由美子研究員

・大阪都市研究会（科研基盤B）「『都市回帰』時代における大都市の構造変容－大阪市を事例として－」（代表：同志社大学・社会学部・鰺坂学先生）の尼崎視察コーディネーター（11月14日）。
・雲南市人権センターにて、「女性の人権問題を考える―女性にとっての家庭・職場・社会参加に関する日韓比較―」と題する報告（２月19日）。
・くにびきメッセにて、「シンポジウム：自治会区における新たな支え合いの実践」（平成21年度しまね流自治会区小地域福祉活動推進フォーラム）におけるコーディネーター（３月５日）。

○坂部晶子研究員

・成城大学で開催された第７回東アジア社会学者ネットワーク会議にて、“Multi-layered Memories of “Manchuria” in a Border Town”と題する報告（10月８日）。
・中国上海にて、浜田市地域振興研究会にかかわるアンケート調査を実施（11月５～８日）。
・滋賀大学にて開催されたAsian Studies Workshop ５（『「満洲」経験の社会学』を読む／語る）に参加（11月27日）。
・浜田近辺にて、浜田地域振興研究にかかわる現地調査（12月３・４・10日、１月25日）。
・松江（島根県庁）にて、浜田地域振興研究にかかわる聞きとり調査（１月28日）。
・浜田市にて、「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会のワークショップ「重層的アイデンティティと地域研究の高度化」において､「非対称的なアイデンティティ（同一性）の狭間を読む―『満洲国』の記憶の重層性を手がかりに」と題する報告（３月15日）。
・浜田市と島根県立大学との共同研究成果報告会にて、上海での調査結果について報告（３月27日）。

○唐燕霞研究員

・浜田市にて、第５回「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会にて、「中国における北東アジア地域研究の概観」と題する報告（１月19日）。
・島根県立大学にて、科研費唐プロジェクトと旧NEAR財団唐プロジェクト共催のワークショップ「中国基層社会『社区』建設と自治のあり方」の座長（３月９日）。
・同志社大学にて、科研費唐プロジェクトと旧NEAR財団唐プロジェクト共催のワークショップの座長（３月10日）。
・島根県立大学にて、「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会ワークショップの司会（2010年３月15日）。
・中国・上海・南京にて、「社区」についての調査・資料収集（３月22日～31日）。
・中国・南京大学にて、「基層社会の自治について」と題する講演・講義（３月25日）。

○林裕明研究員

・ロシア・ハバロフスク・スーパーサンベリにて食の安全に関する調査（10月４―８日）。
・比較経済体制学会・秋季大会（立命館大学）に

て第３分科会「財政からみた中国経済・ロシア経済」の座長（10月24日）。
・EUIJ学術ワークショップ「ロシア：EUと日本との狭間？」(京都大学)にてコメンテーター(10月25日)。
・浜田市・松江市にて、NEARカレッジの講師「北東アジアにおける地域経済統合の深化と日ロ経済関係」(10月27～28日)。
・法政大学にて、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第２回国際シンポジウム「ユーラシア地域大国の政治比較:中国, ロシア, インド, トルコ」において、「ロシアの中間層－構成と価値観にみる多様性－」と題する報告(12月13日)。
・京都大学にて、マクロ経済学・経済システム研究会（比較経済体制研究会と共催）にて「ロシアにおける経済危機の社会的インパクト」と題する報告（２月19日)。
・ウラジオストク・ロシア国立海洋大学にて旧NEAR財団共同研究にかかわるシンポジウムに参加、報告（３月９日)。
・上海にて中印露中間層比較研にかかわる調査（３月14～16日)。
・モスクワにて中印露中間比較研究にかかわる調査（３月20～24日)。
・浜田市にて、NEARセンター共同研究報告会で報告（３月27日)。

○福原裕二研究員
・韓国釜慶大学にて、「北東アジアにおける英語使用環境の構築」に関わる説明会の実施（10月26日)。
・韓国ソウル（ロッテデパート蚕室店）にて、浜田地域振興研究に関わるアンケート調査の実施(10月27日)。
・韓国啓明大学校（日韓・日朝交流史研究会、竹島／独島研究会）にて、「島根県総務課所蔵文書解題」と題する報告（10月29日)。
・浜田及び松江にて、「日韓漁業問題と竹島問題の交錯」(NEARカレッジ）と題する講義（11月10／11日)。
・浜田（くにびき学園）にて、「日韓交流史（『真の日韓交流』とは何か)」と題する講義（12月４日)。
・浜田（くにびき学園）にて、「北朝鮮による日本人拉致問題とその周辺」と題する講義（１月22日)。
・韓国（ソウル、浦項）にて、学術教育研究特別助成金に関わる資料収集（１月27～31日)。
・東京（福武学術文化振興財団）にて、研究助成贈呈式に出席（３月４日)。
・ウラジオストク（ロシア国立海洋大学；北東アジア地域学術交流研究助成金に関わるシンポジウム）にて、「漁業問題と領土問題の交錯」と題する報告（３月９日)。
・浜田（浜田地域振興研究に関わる最終報告会）にて、「韓国班成果報告」と題する報告（３月27日)。

○李暁東研究員
・中国北京大学にて、島根県立大学・北京大学合同シンポジウムに参加。「人」の視点から見る中国の環境と発展－田中正造と鉱毒問題の例を通じて」と題する報告を行う（11月２～４日)。
・台湾・台北にて、浜田市地域振興研究会にかかわるアンケート調査を実施（11月９～13日)。
・津和野にて、本学の西周研究会主催が主催する「西周シンポジウム－世代を超えて受け継ぐ西周の意義」に参加（11月14日)。
・浜田市にて、科研費唐プロジェクトと旧NEAR財団唐プロジェクト共催のワークショップのコメンテーター（３月９日)。
・浜田市にて、「交錯する北東アジア・アイデンティティの諸相」研究会のワークショップ「重層的アイデンティティと地域研究の高度化」の座長（３月15日)。

○新井健一郎助手
・神戸（神戸大学）にて、「社会思想史学会第34回大会」参加（10月30日～11月２日)。

NEAR News 第35号
2010年3月発行
【編集発行】
島根県立大学北東アジア地域研究センター
〒697－0016
島根県浜田市野原町2433－2
Tel 0855－24－2375
Fax 0855－24－2383
E-mail:near-c@u-shimane.ac.jp
ホームページ:http://www.u-shimane.ac.jp/36near/